

セッション「1910～20年代におけるマルクス/エンゲルス著作の翻訳＝普及」

組織者 大村 泉（東北大学）

日本におけるマルクス/エンゲルスの著作の翻訳・刊行の歴史は、今からおよそ100年前に始まる。日本が欧州の学問や思想を導入した明治期（1868年～1912年）の1904年に、堺利彦と幸徳秋水によって邦訳された『共産党宣言』が始まりである。その後、何度かの隆盛期を経ながら、現在に至るまで数多くの邦訳が、単行本、パンフレット、雑誌・新聞記事の形態で刊行されてきた。これらの邦訳の歴史は、そのまま20世紀の日本におけるマルクス主義の導入と普及の歴史を映し出す。ここでその出版点数に着目すると、日本のマルクス/エンゲルス文献の邦訳史には次の3つの高揚期を見出すことができる。

第1期：1924～1932年（総計：367点、ピーク：1927年67点）

第2期：1946～1955年（総計：372点、ピーク：1948年及び1949年54点）

第3期：1962～1974年（総計：272点、ピーク：1962年及び1974年26点）

*出版点数は、雑誌掲載、パンフレット、単行本の集計。全集の巻や分冊ごとに合計している。例えば2分冊形式のものは2点として数えている（大村泉＋宮川彰編『新MEGA第II部関連内外研究文献・マルクス/エンゲルス著作邦訳史集成』、八朔社、1999年、参照）

邦訳点数がピークに達したのは、治安維持法が撤廃された第二次大戦直後の10年間ではなく、大正末期から昭和初期の一時期であった。この時期は、マルクス/エンゲルスの思想と学説が、多くの翻訳家と出版社を通して競い合って紹介された。ピークの1927年に翻訳・刊行された主なタイトルを拾うと、マルクスについては、『資本論』（部分訳）、『資本論入門』（モスト）、『賃金・価格・利潤』、『ゴータ綱領批判』、『剰余価値学説史』（部分訳）、『哲学の貧困』、『独仏年誌』、『デモクリットとエピクルとの自然哲学の差異』などを見出せる。エンゲルスについて、『資本論入門』、『ドイツ農民戦争』、『猿が人間になるについての労働の役割』、『空想から科学への社会主義の発展』、『反デューリング論』、『家族・私有財産および国家の起源』、『1848年のドイツにおける革命と反革命』などがある。この第1の高揚期において、改造社から『マルクス/エンゲルス全集』が刊行され、すでに著名な著作の多くが邦訳されている。

このセッションは、わが国のマルクス/エンゲルスの著作の翻訳＝普及の黎明期とも言うべきこの1910～20年代に着目し、そもそもこうした時期にどのようなマルクス/エンゲルス文献の紹介（翻訳）が行われたのか、この翻訳普及とマルクス/エンゲルス研究の国際動向、特にコミンテルン（共産主義インターナショナル、1919～1935年）との関係はどうか、この翻訳普及にどのような人物、どのようなグループが関与していたのか、その特徴はどうか、その後の翻訳に与えた影響はどうか、これらの翻訳と相前後してどのような問題が当時の論壇で話題になっていたのかを考える。

戦前日本におけるマルクス主義普及史の研究は、1930年代の日本資本主義論争を中心に進められてきたといっても過言ではなく、この時期については、例えば、幸徳や河上らの伝記的研究や明治期末期の初期社会主義運動から大逆事件を経て大正デモクラシーへと連なる社会思想史的研究との関連で言及されてきたに止まり、この時期のマルクス/エンゲルス著作の翻訳＝普及そのものが主題的に論じられたことはなかった。このセッションでは、こうした研究史上の欠落を埋めるために、この分野での最新の研究成果を紹介する。